

令和元年6月14日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16176

研究課題名(和文)夫婦の相互作用と生活家事遂行の過程の理解：個別具体的プロセスの記述に基づいた検討

研究課題名(英文)Changing process in performing family work and interactions in couples

研究代表者

滑田 明暢 (Nameda, Akinobu)

静岡大学・大学教育センター・講師

研究者番号：00706674

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、夫婦の相互作用と生活家事の変化との関連および生活家事の変化の過程の検討を行った。関連を検討した調査からは、家事育児への参加を配偶者に依頼する(あるいは配偶者から依頼される)ことによって、約6割から7割の人たちが何らかの形で配偶者(あるいは自分)が参加するようになったと感じていることが示された。参加によって、家事育児の頻度以外の変化が起きた事例もあった。過程の検討からは、生活家事が変化するときには、ライフイベントがきっかけとなって生活時間構造あるいは健康状態の変化がまず起こり、その変化に対して夫婦が対応して起きた結果がその後定着する過程が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

夫婦の相互作用によって家事にどのような変化が起こるのかという問いに対しては、育児におけるゲートキーピング研究を含め一定の知見は蓄積されているものの、相互作用ごとの機能等の整理と検討はまだ必要な状況である。夫婦間の依頼によってどのような変化が起こるのか等を検討した本研究の成果は、その整理と検討に貢献する知見である。

また本研究の成果には、生活家事が変化する際に起こる諸事象を具体的な生活文脈の記述をもとに検討した結果を含む。そのため、今後生活家事を遂行していく方々が本研究の成果を参照することで、何をすればどのようなことが起こる可能性があるか、その結果の範囲と道筋を展望することも可能である。

研究成果の概要(英文)：The present study examined the changing process in performing family work and the functions of couples' interactions in it. A survey conducted in our study showed that about 60 to 70 % of the participants who asked to their spouse (or were asked by their spouse) to participate in housework and childcare felt that their spouse started to participation in (or they started to participant in). There were the cases that some of them got the changes of not only the amount of the participation but the other aspects including the relationships with their children and the way of thinking to performing family work and paid work. Describing and examining the changing process in performing with the data of another survey, we found the process that the changes in time and physical availability in their life style or in health conditions, that were triggered by the life events happened, firstly occurred, and in turn the changes came to stay as the results of the couples' reactions to those.

研究分野：家政生活学一般

キーワード：生活家事 夫婦 相互作用

1. 研究開始当初の背景

現代の日本では、男女共同参画社会を目指しながらも、「男は仕事、女は家庭」の性別役割分業が依然として維持されているといえる(例えば、総務省, 2011)。この現状を受けて、男性の家事育児参加の規定因を探る研究がこれまでも行われており、それらの研究では、時間的余裕がある場合に家事育児に参加することが示されている(例えば、松田, 2006)。一方で、時間的余裕があることで自動的に家事育児に参加するようになるわけではないため、その他の要因を検討することが必要となる。

時間的余裕の他に、男性の家事育児参加を説明する要因の一つとして考えられているのがゲートキーピングである。ゲートキーピングとは、女性(あるいは妻/母親)が男性(あるいは夫/父親)の家事育児参加の領域を決定しようとする行動である(石井クンツ, 2013)。例えば、男性(夫/父親)の育児行動を批判することがその育児機会を抑制し、男性(夫/父親)と子どもとのやりとりを励ますことがその育児機会を増加させることがこれまでの先行研究で指摘されている(例えば、Cannon et al., 2008; Schoppe-Sullivan et al., 2008)。

こうしたゲートキーピング研究が多く蓄積されている一方で、その概念や測定の方法は多様である(加藤・黒澤・神谷, 2012)。これまでの研究知見を概観してその概念の再定義を試みた研究は存在するが(Puhlman & Pasley, 2013)、ゲートキーピングをめぐる夫婦の相互作用の種類や方法については引き続き整理と検討が必要な状況にある。また、多くのゲートキーピング研究は育児に焦点を当ててきた。一方で、育児以外の就労、家事、介護などに夫婦/家族でどのように向き合っていくかは重要な問題となるため、生活家事(就労による家計への貢献、家事、育児、介護なども含む、生活に必要な仕事)をめぐる夫婦の相互作用にも注目する必要がある。

これまでに滑田(研究代表者)は、育児だけでなく就労による家計への貢献や家事なども含めて生活家事とし、夫婦の相互作用との関連のなかで生活家事の遂行を検討してきた。主な研究として、育児期以外の個人も協力者とした質問紙調査を用いて、夫婦間での相互コミュニケーション(意見を言う機会、話し合い、パートナーによる傾聴、パートナーによる感謝の有無)と生活家事の遂行に関わる不公正感との関連を検討したものがあつた(Nameda, 2013)。その結果として、夫婦間で相互コミュニケーションがとられていると感じている場合には、不公正感は抱かれぬ傾向が確認された。しかし、この傾向は女性の協力者においてのみ確認されたものであつた。相互作用の影響が何故性別で異なるものであつたのかを説明する方法の一つは、夫婦の相互作用がどのような背景のもとで実践され、どのような経緯でその影響がもたらされたのかを理解することであろう。つまり、夫婦のどのような相互作用によって生活家事の遂行がどのように調整されているのか、その変化の内容とその過程を明らかにすることが必要となつている。

2. 研究の目的

本研究の全体的な構想は、夫婦の相互作用が生活家事(就労による家計への貢献や家事、育児、介護など、生活に必要な仕事)の遂行にどのような影響を与えているのかを検討することである。そのため、本研究の具体的な目的は、1、夫婦の相互作用が生活家事の遂行に与える影響を検討するとともに、2、生活家事の遂行における夫婦の相互作用の過程を記述することである。

3. 研究の方法

1)「夫婦の相互作用と生活家事との関連」を多くの人のなかでの傾向を捉える質問紙調査と、2)「夫婦の相互作用と生活家事が遂行される過程」をその背景文脈とともに捉えるためのインタビュー調査から検討を行った。

1) 生活家事の遂行と夫婦の相互作用との関連の検討

夫婦の生活家事の遂行と夫婦の相互作用との関連を検討するために、質問紙調査を実施した。517名の参加を得た。質問紙調査では、日常的に行っている家事、家事育児の遂行量(1日あたりの時間、配偶者と比較した相対的な遂行量)、夫婦の相互作用(家事育児の参加依頼など)、家事分担の満足度など、を尋ねた。

2) 夫婦の相互作用と生活家事が遂行される過程の理解

生活家事に変化が起こる場面に焦点を当て、いつ、どのようなときに生活家事が変化するのか、そして変化をめぐる夫婦あるいは家族における調整の過程を理解するために、9名の参加を得たインタビュー調査を題材に検討を行った。インタビューでは、いつ、どの時期に、誰が、どの生活家事をどの程度遂行していたか、大きな変化があつた時期はあつたか、生活家事の形態はどのように決めたか、決まったか、それについて話し合いはあつたかどうか、などが尋ねられた。

4. 研究成果

1) 生活家事の遂行と夫婦の相互作用との関連の検討

夫婦の相互作用と生活家事遂行との関連を検討するため、家事育児（介護も含む）への参加を配偶者に求めた / 配偶者から求められた経験とそれによって起きた変化を尋ねた項目の結果を検討した。結果として、参加者の約4割が家事育児に参加を求めた経験があると回答していた。そして、参加を求めた結果、変化があったと回答している人たちはそのうち約6割4分であった。一方で、参加を求められた経験のある参加者は約2割8分であった。参加を求められた参加者のうち、約7割はそれに応じて変化を起こしたと回答していた。

配偶者に参加を求めた結果あるいは、配偶者から参加を求められた結果、具体的にどのようなことが起きていたのかを検討するため、結果として起きたことについての自由記述回答を整理した。配偶者に家事育児への参加を求めた経験があると回答した参加者の多くは女性であった。また、参加を求められた経験があると回答した参加者の多くが男性であった。そのため、参加を求めた経験のある女性の自由記述回答と、参加を求められた経験のある男性の自由記述回答をそれぞれまとめた。まとめる際には、KJ法（川喜田, 1967; 1970; 1986）に準ずる方法を用いた。具体的には、まずそれぞれの記述を一つの意味のまとまりとしてとらえて切片化した。そして、同じ内容と感じられる記述をまとめ、その記述のまとまりの内容を反映した具体的なラベルをつけ、さらに同じ内容をもつと感じられるまとまり同士をまとめてラベルをつける作業を繰り返し、個別の諸記述の内容を反映した抽象度の高いまとまりを作成していった。まとまりのラベルがある程度の抽象度をもった時点で、まとまり同士の関係性を考慮して図解して整理した。（図中において、四角内の太字が最も抽象度の高いまとまり、その他の四隅が丸の四角が次に抽象度の高いまとまりのラベルを示している。四角同士を結ぶ細線は、まとまり同士に関連があると考えられる箇所を示されている。）

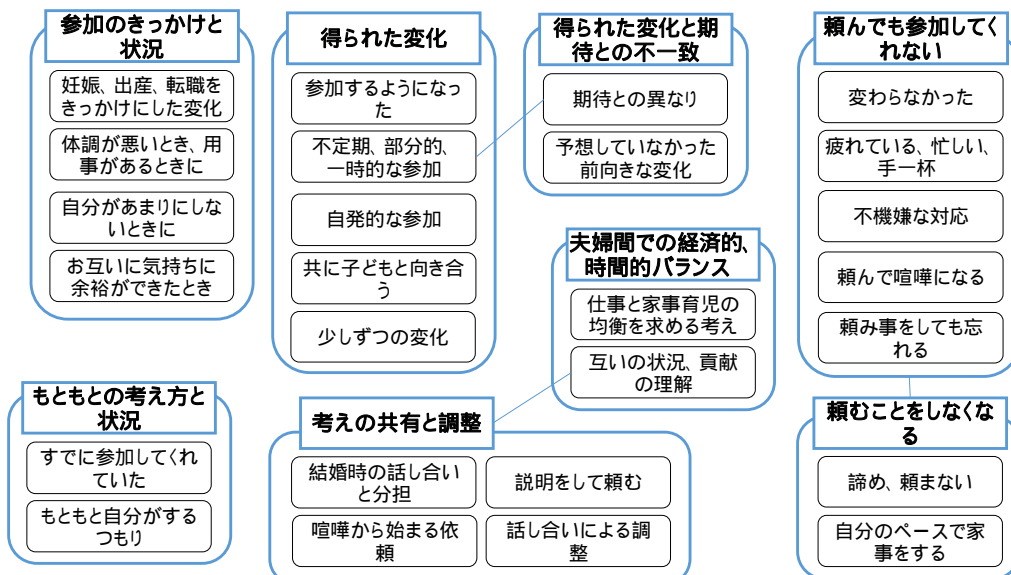


図1 参加を求めた結果起きたこと（女性による自由記述回答）

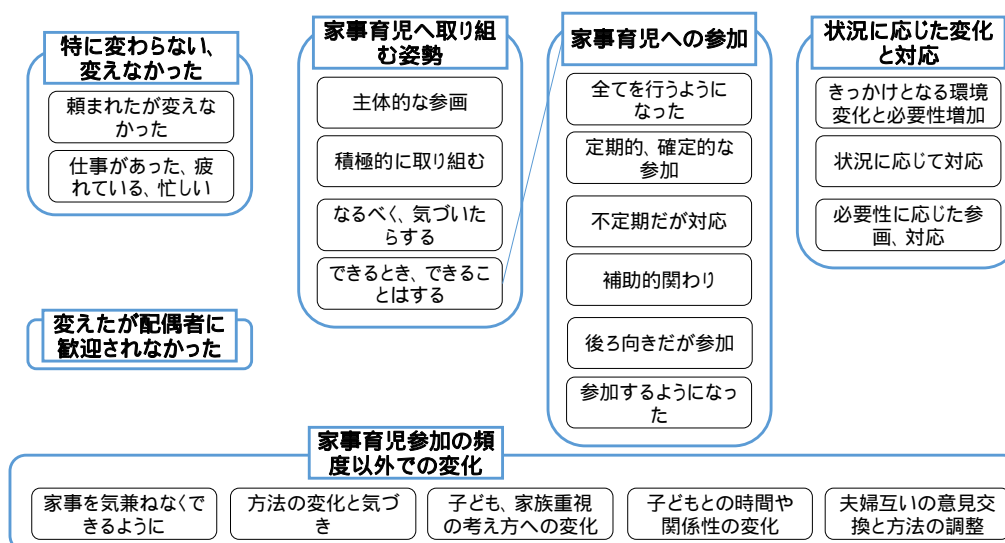


図2 参加を求められた結果起きたこと（男性による自由記述回答）

配偶者に参加を求めて起きたことと配偶者から参加を求められて行ったことに共通していたのは、忙しい、疲れているなどの理由から変化が起こらなかった場合があること、妊娠出産などの状況変化に応じて変化するようになった場合があること、変化があった場合にも、不定期、部分的な参加から主体的な参加に至るまで、様々な形での変化が見られたことである（図1；図2を参照）。また、変化はあったものの、その変化が参加を求めた側の期待とは一致しなかった事例もあった。夫婦互いの考えを共有、調整した事例、家事育児の頻度以外の変化が起こった事例もあった。つまり、これらの結果から、夫婦の相互作用の一つとしての家事育児の依頼は、依頼された配偶者の家事育児のさらなる遂行を引き出す場合もあれば、引き出さない場合もあり、さらには、遂行の量や頻度、取り組み方の変化を起こすだけではなく、夫婦関係や親子関係、夫婦それぞれの気づきや考え方の変化をときには生み出すものであることが示された。今後は、遂行の量や頻度、取り組み方の変化に注目するだけではなく、考え方や家族の関係性の変化などの変化にも注目をして、夫婦の相互作用と生活家事の関連性を理解していくことが期待される。

2) 夫婦の相互作用と生活家事が遂行される過程の理解

家事が変化する過程を理解するため、家事の変化を、家庭内の仕事の増減と夫婦間の移動の観点から整理した。まず、夫婦のいずれかに家事の増減がみられたとする語りを抽出した。そして、それらの語りをもとに事例を抽出した。結果として16事例抽出された。それらの事例を、家事の増減と移動の形式によって整理すると、4つの形式に整理することができた。「家事が妻へ移動」「家事が夫へ移動」「夫婦いずれかの家事が増加」「夫婦ともに家事が増加」の4つである。

家事が妻あるいは夫に移動する形式において共通していたのは、妻あるいは夫が家事をすることにおける時間的物理的な可能さの変化が、家事の移動に先立って起きていたことだった。例えば、出産や、配偶者あるいは自分の勤務形態の変更などが起こることによって、一方が家事をすることが難しくなる、あるいは一方が家事をすることが時間的にも物理的にも可能になる、といった変化が、家事の移動の前に起きていた。一方で、時間的物理的な変化によるのみ移動もたらされる訳ではないことがうかがえる。その事例として、一方の配偶者がもう一方の配偶者に替わって家事を遂行することが定着する事例があった。ここでは、一方の配偶者は料理をつくるのが体調変化によって苦しくなってきたという家事の可能さの変化は起きていたものの、そこで、もう一方の配偶者は、自分が代わって行うことを申し出ている。つまり、夫婦の相互作用によって、変更が導かれていたのである。また、別の事例では、時間的物理的にもう一方の配偶者に家事の依頼をすることができる状態においても、家事の依頼をしないということがあった。家事の移動は、時間的物理的な可能さの変化をきっかけとしてもたらされると考えることができるが、それだけで変化が起こる場合だけではなく、その状況に夫婦でどのように相互作用しながら対応するか、ということが、その移動とその形の定着を導くかどうかを決めていると考えることができる。

家事が増加していた事例を見ると、今回題材とした調査結果においては、移住が先立って家事が増加していた。結果として、その移住の際に必要な家事を行うスキルがある配偶者が遂行をしていた。そのため、スキルの面での可能さが、移住によって増加した家事を夫婦のどちらかが行うかを決めていたようである。

まとめると、それぞれの家事変化においては、ライフイベント等による時間的物理的・生活構造の変化や体調の変化が起こり、その後、それらへの夫婦での相互作用を含めた適応がなされることが、大枠の法則性として働いている流れであると考えられる。時間的物理的変化が家事遂行の変化のきっかけとなるものであると考えられるが、同じ生活時間構造のなかでも、夫婦間での相互作用がどのように行われるかによって、家事の変化の形が決められるようにも考えられる。

引用文献

- Cannon, E. A., Schoppe-Sullivan, S. J., Mangelsdorf, S. C., Brown, G. L., & Szewczyk Sokolowski A. R. E. T. (2008). Parent characteristics as antecedents of maternal gatekeeping and fathering behavior. *Family Process*, 47(4), 501-519.
- 石井クンツ昌子 (2013). 「育メン」現象の社会学 育児・子育て参加への希望を叶えるために ミネルヴァ書房.
- 加藤道代・黒澤泰・神谷哲司 (2012). 母親の gatekeeping に関する研究動向と課題: 夫婦ペアレンティングの理解のために. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 61(1), 109-126.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 創造性開発のために 中央公論社.
- 川喜田二郎 (1970). 続発想法 KJ法の展開と応用 中央公論社.
- 川喜田二郎 (1986). KJ法 渾沌をして語らしめる 中央公論社.
- 松田茂樹 (2006). 近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化 季刊家計経済研究, 71, 45-54.
- Nameda, A. (2013). Sense of fairness in the division of labor in close relationships: Procedure and gender role ideology. *Japanese Psychological Research*, 55(1), 33-44.

Puhlman, D. J., & Pasley, K. (2013). Rethinking maternal gatekeeping. *Journal of family theory & review*, 5(3), 176-193.

Schoppe-Sullivan, S. J., Brown, G. L., Cannon, E. A., Mangelsdorf, S. C., & Sokolowski, M. S. (2008). Maternal gatekeeping, coparenting quality, and fathering behavior in families with infants. *Journal of Family Psychology*, 22(3), 389.

総務省 (2011). 平成 23 年社会生活基本調査 総務省統計局 .

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 8 件)

「Akinobu Nameda」, 「How does the form of family work change?: The functions of interactions in couples」 「International Convention of Psychological Science 2019」 「2019年3月8日」 「Palais des Congrès de Paris, Paris (France)」

「Akinobu Nameda」, 「Fairness in performing family work in close relationships: Exploration with the perspectives of Kaji harassment」 「12th East Asian Association of Psychology and Law Conference」 「2018年12月15日」 「Ritsumeikan University, Kyoto (Japan)」

「Akinobu Nameda」, 「Perception of fairness in close relationships: Money sharing and household work discussed in online community」, 「The 10th Conference East Asian Association of Psychology and Law」, 「2016年10月22日」, 「THE CLOUD Hotel, Jeju-do (Korea)」

「Akinobu Nameda」, 「Understanding the changing and maintaining process of performing family work from the perspective of Compositionwork and the Trajectory Equifinality Approach」, 「9th International Conference on the Dialogical Self」, 「2016年9月8日」, 「John Paul II Catholic University of Lublin, Lublin (Poland)」

「Akinobu Nameda」, 「Achieving harmony and fairness in performing family work in close relationships」, 「31st International Congress of Psychology」, 「2016年7月28日」, 「Pacifico Yokohama Conference Center, Yokohama (Japan)」

「Akinobu Nameda」, 「Perception of fairness in performing roles in family: Distributive justice and the change」, 「The International Academic Forum, The Asian Conference on Education 2015」, 「2015年10月24日」, 「Art Center of Kobe, Kobe city (Japan)」

「滑田明暢」, 「対話的自己と対人葛藤、紛争解決」, 「日本質的心理学会第12回大会」, 「2015年10月4日」, 「宮城教育大学(宮城県、仙台市)」

「滑田明暢」, 「夫婦の生活家事の調整過程」, 「日本心理学会第79回大会」, 「2015年9月22日」, 「名古屋国際会議場(愛知県、名古屋市)」

[図書](計 1 件)

「滑田明暢」, 「ミネルヴァ書房」, 「家事と社会と個人の日常生活 その前提にある考え方を考察する (アクティブラーニングで学ぶジェンダー 現代を生きるための12の実践(青野篤子 編著))」, 「2016年」, 「218 (147-159)」

6 . 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。